

# 環境文明21での活動を通して

仲亀 壮流 (なかがめ たける / 2021年度インターン生)

8ヶ月のインターン活動が終わったので、「私の変化」と「今後の課題」を中心に報告させていただきます。

活動以前の私は脱炭素社会に強い関心を持っており、環境NPOの活動を通じて知識を身に着けたいという目的がありました。日本経済新聞を購読する中でも、脱炭素社会への移行に向けた国際的な潮流は不可逆的なものであるということ強く感じました。就職活動を終えてから、環境文明21のインターンに参加することになるのですが、脱炭素や環境問題に対する考え方が随分変わったものだと振り返っています。

当初、環境問題について十分な理解はありませんでしたが、脱炭素社会を実現するにあたっては最先端技術の活用が不可欠であると考えていました（経済成長と環境対策を両立していくことがまさに理想です）。キーワードとしては、水素/アンモニア・核融合炉・CCS/CCUS・スマートグリッドといったところでしょうか。知識という土台が無いにもかかわらず、企業研究・業界研究のもと、企業のプレスリリースや新技術の研究開発に関する新聞記事、ビジネス雑誌の特集記事を鵜呑みにしていました。藤村代表と面接で最初にお会いした際に、矢継ぎ早に質問を投げかけられ、「あれ？自分の考えていたことは違うのかもしれない」と感じたのを今でも覚えています。

過去の自分との対比で現在の立ち位置を語るのであれば、インターン活動によって知識の習得やリテラシー能力の向上といった成果があったと思います。具体的な活動内容としては、環文セミナーや倫理部会への参加・会報の校正作業・職員の方々との

ディスカッションがあり、これらを通じて今日の環境問題を根本的に考える思考が身についたと自負しています。私よりも遥かに知識を持っている方々の意見に触れることで、理解を深めるとともに新たな関心事項が生まれました。気づけば、脱炭素だけを学ぶために始めた私のインターン活動が広がりを見せていました。それは必ずしも環境問題に限らず、市民参加型の政策形成といったテーマも含まれます。

次に、これまでのインターン活動を踏まえた上で、今後の課題について稚拙ながら述べたいと思います。当初の目的であった知識の獲得は決して十分なものではありません。これからも学ぶ姿勢を持ち続ける必要があります。むしろ、2030年（2050年）に向けて注視すべきです。

さらに重要なことは行動することだと考えています。全国交流大会でも議論された行動についてですが、今の私は「環境問題について認識している」段階であり、「解決に向けて社会に働きかける」段階には立っていません。かなりハードルの高いことであると認識していますが、最終的な到達地点であることは間違いありません。

そして、4月から民間企業（電機メーカー）で働くことになるのですが、組織の色に完全に染まってしまうのではなく、これまでと同じように違和感や不信感などを持ち続け、環境文明21の活動を「過去の出来事」にしない努力をしてきたいです。加藤顧問からも口酸っぱく言われましたので。

